

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

金剛界マンダラの観想法

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2010-02-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 立川, 武蔵 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003548

金剛界マンダラの観想法

立川 武蔵*

1. 金剛界マンダラの構成

マンダラの初期的形態が現れるのは、4、5世紀頃と推定されている。それは祭壇にわずかな数の尊像を配置したような簡単な構造のものであったろう。仏教タントリズムが確立するのは、7世紀頃に編纂されたと思われる『大日経』によってである。この経典には2、3メートル四方のマンダラが地面の上にさまざまな色の粉によって描かれるべきだと述べられている。この経典に基いて描かれるマンダラが胎蔵（あるいは胎生）マンダラであり、これは日本のタントリズム（密教）の歴史の中で、金剛界マンダラと並んでもっとも重要なものと考えられてきた。『大日経』の述べるマンダラには約120の神々が登場しており、マンダラが2、3世紀間の内にかなり複雑なものに発展したことを窺うことができる。因みに、空海が中国から将来した胎蔵マンダラは400以上の神々を含んでいるが、これは中国において『大日経』の解釈が発展した結果である。しかし、インドにおいて『大日経』が仏教タントリズムの中で果たした役割はそれほど大きなものではなかった。というのは、7、8世紀以後は、7世紀から8世紀にかけて編纂されたと推定される『金剛頂経』^{こんごうちやう}に基く金剛界マンダラが仏教タントリズムの基本的マンダラとなったからである。

空海が将来し、日本の仏教タントリズムの中でよく知られてきた金剛界マンダラは、9つのマンダラが井桁状に並んだものであるが、インド、ネパールおよびチベットで「金剛界マンダラ」の名で知られてきたものは井桁状に並んだ9つのマンダラの中央のものであり、この部分は日本では「成身会」と呼ばれてきた。この稿では「金剛界マンダラ」という名称のよってインド、ネパールの伝統の金剛界マンダラを指し示すことにしたい。

図1は金剛界マンダラの構成を示している。

マンダラは常に中核となる尊格、つまり中尊を有する。マンダラの中尊はほとんどの場合1人であるが、時には1つのマンダラの中に複数のマンダラが含まれるので、かの大きなマンダラの中核は複数の尊格となる場合もある。金剛界マンダラの中尊はヴ

* 国立民族学博物館 第二研究部

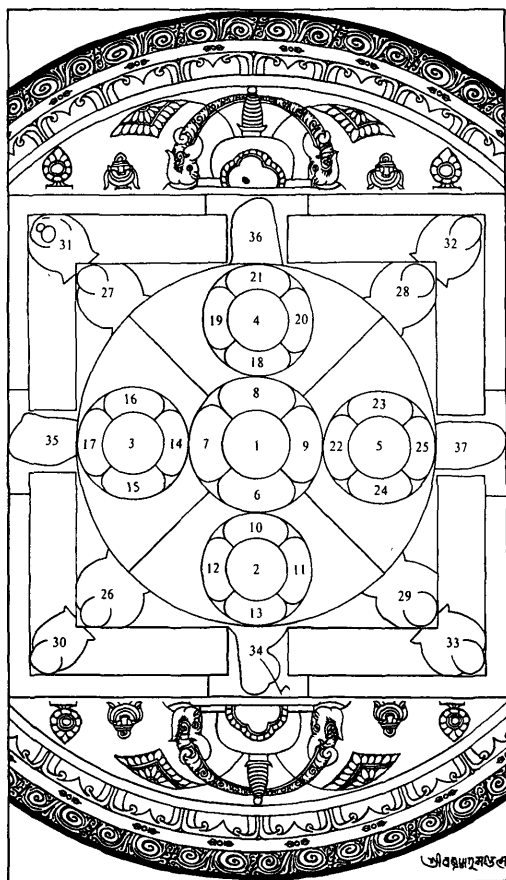


図1 金剛界マンダラ構成図

- | | | |
|-------------------------|-----------------------|------------------|
| 中尊 | 11 金剛王
(不空王, 金剛鉤召) | 25 金剛拳菩薩
八供養女 |
| 1 ヴァイローチャナ (毘盧遮那) | 12 金剛愛菩薩 | 26 金剛嬉女 |
| 四仏 | 13 金剛喜菩薩 | 27 金剛鬘女 |
| 2 阿閼如来 | 14 金剛宝菩薩 | 28 金剛歌女 |
| 3 宝生如来 | 15 金剛光菩薩 | 29 金剛舞女 |
| 4 阿弥陀如来 | 16 金剛幢菩薩 | 30 金剛香女 |
| 5 不空成就如来 | 17 金剛笑菩薩 | 31 金剛華女 |
| 四妃 (四波羅蜜) | 18 金剛法菩薩 | 32 金剛燈女 |
| 6 金剛波羅蜜 | 19 金剛利菩薩 | 33 金剛塗女 |
| 7 宝波羅蜜 | 20 金剛因菩薩 | 四問衛 |
| 8 法波羅蜜 | 21 金剛語菩薩 | 34 金剛鉤 |
| 9 羯磨波羅蜜 | 22 金剛業菩薩 | 35 金剛索 |
| 十六大菩薩 | 23 金剛護菩薩 | 36 金剛鏢 |
| 10 ヴァジュラサットヴァ
(金剛薩埵) | 24 金剛牙菩薩 | 37 金剛鈴 |

ヴァイローチャナ（毘盧遮那）如来（図1，1）である，その中尊の四方に四仏がいる。この場合の四仏とは，東方（マンダラでは下）の阿闍如来（図1，2），南方（マンダラでは向かって左）の宝生如来（図1，3），西方（上）の阿弥陀如来（図1，4）および北方（向かって右）の不空成就如来（図1，5）をいう。これらの四仏と中尊を合わせて五仏というが，この五仏が金剛界マンダラの主要な尊格である。金剛界マンダラはこの五仏を中心として菩薩，供養女尊，門衛たちが立ち並ぶマンダラである。

実際の観想法においてはまず，四仏それぞれの周囲にあたる場所に4人ずつの菩薩，つまり16人の菩薩（十六大菩薩）が「登場する。」「登場する」とは，マンダラを観想あるいは瞑想する行者が自らの精神集中（三昧）によって精神的に生み出すことを意味する。これらの16人の菩薩は如来（仏）たちの特性を示している。

図1では中尊ヴァイローチャナと四仏との間に四人の尊格（図1，6～9）が位置しているのが見受けられる。これらは女尊であるが，彼女らは四仏の力（シャクティ）と考えられている。「シャクティ」という語は妃の意味にも用いられるようになり，四仏の力（エネルギー）は神格化されて「四仏の妃」（四妃）と呼ばれてきた。また伝統的にはこの四妃は「四波羅蜜」と呼びならわされてきた。「波羅蜜」とは *pāramitā*（最高の状態，完成）を意味し，智慧の完成つまり悟りの智慧を指している。仏教タントリズムの伝統では，智慧を女性として表象したのである。

金剛界マンダラでは四妃の他に8人の供養女尊（如来の活動や如来への供物の神格化）が登場する。彼女らは「内の四供養女」（図1，26～29）と「外の四供養女」（図1，30～33）に二分される。前者のグループは仏たちの活動の人格化であり，後者のグループは菩薩たちが如来たちに捧げる供物の神格化である。

マンダラは通常，4つの門を有する宮殿の中に並ぶ仏たちを描いたものであるが，その四門にはそれぞれ門衛が立っている（図1，34～37）。これらの門衛は「四撰菩薩」と呼びならわされてきた。

以上，五仏，十六大菩薩，四妃，八供養女，四門衛，すなわち37の尊格によって金剛界マンダラは成立するのである。

2. 『金剛頂経』と金剛界マンダラ

すでに述べたように，金剛界マンダラは『金剛頂経』に述べられているところに従って描かれたマンダラである。金剛界マンダラには数多くのヴァリエーションが存在

するのであるが、『金剛頂経』は実際に二十数種の金剛界マンダラを説明している。現在残っているかたちの『金剛頂経』はその二十数種の金剛界マンダラの観想法、描き方、儀礼の規則等のコレクションとすることができる。チベットのギャンツェに残るペンコルチューデの仏塔の5階の壁面には『金剛頂経』に説明される金剛界マンダラのひとつが描かれている。このように1つの寺院の内にこれほど多くの金剛界マンダラのヴァリエーションが描かれている例は他には見られない。この意味でペンコルチューデの仏塔の壁面は金剛界マンダラ、ひいてはマンダラ一般の解明にとって重要な資料となる。

本稿が扱うマンダラは、それらの数多くの金剛界マンダラの中の第一番目のもの、すなわち「金剛界大マンダラ」である。堀内寛仁氏による校訂本では「第一章金剛界大曼荼羅」に相当するのであるが、本稿ではその第一章の内の前半の部分、すなわち「金剛界マンダラの諸尊の出生」の部分にあたる§.190までを特に扱うことにしたい。

上記のテキスト部分の概容を堀内校訂本のテキスト番号と共に挙げるならば次頁の表1のようである。因みに『金剛頂経』は、第一「金剛界品」、第二「降三世品」、第三「遍調伏品」および第四「一切義成就品」の四品（編）に分かれており、第一「金剛界品」の内の第1章が「金剛界大マンダラ」の説明である。

3. 三段階による瞑想

表1に示された内容は序を別にすれば、3つの部分に分かれる。堀内校訂本においてそれらの三者それぞれは次のように呼ばれている。

1. 第一瑜伽の三摩地（サマーディ、三昧）
2. 最勝マンダラ王の三摩地
3. 最勝羯磨王の三摩地

これらはつぎのように言い換えることができよう。

- 1'. 第一ヨーガと名づけられた瞑想
- 2'. もっとも勝れたマンダラの王と名づけられた瞑想
- 3'. もっとも勝れた行為の王と名づけられた瞑想

堀内本に見られる上記の名称は『金剛頂経』自体に見出されるものではなく、校訂者の堀内氏が『金剛頂経』に対するアーナンダガルバ著の註釈書『金剛の出現』に従って記したものである。この3つの瞑想（三昧）は、アーナンダガルバの時代あたり

表1 『金剛頂経』第1品(編)第1章前半の内容

0. 序	§. 1~17
1. 観想主体の確立(五相成身観)	§. 17~2~33
2. 金剛界マンダラの出現	
2.1. 十六大菩薩の出現	
2.1.1. 金剛薩埵	§. 34~43
2.1.2. 金剛王菩薩	§. 44~49
2.1.3. 金剛愛菩薩	§. 50~55
2.1.4. 金剛喜菩薩	§. 56~61
2.1.5. 2.1.1.~4.のまとめ (中略)	§. 62 §. 63~131
2.1.19. 金剛拳菩薩	§. 132~137
2.1.20. 2.1.16.~2.1.19.のまとめ	§. 138
2.2. 四妃(四波羅蜜)の出現	
2.2.1. 金剛波羅蜜	§. 139~141
2.2.2. 金剛宝波羅蜜 (中略)	§. 142~144 §. 145~150
2.2.5. 2.2.1.~4.のまとめ	§. 151
2.3. 八供養女の出現	
2.3.1. 内の四供養女	
2.3.1.1. 金剛嬉女	§. 152~154
2.3.1.2. 金剛鬘女 (中略)	§. 155~157 §. 158~163
2.3.1.5. 2.3.1.1.~4.のまとめ	§. 164
2.3.2. 外の四供養女	
2.3.2.1. 金剛香女	§. 165~167
2.3.2.2. 金剛華女 (中略)	§. 168~170 §. 171~176
2.3.2.5. 2.3.2.1.~4.のまとめ	§. 177
2.4. 四門衛	
2.4.1. 金剛鈎	§. 178~180
2.4.2. 金剛索 (中略)	§. 181~183 §. 184~189
2.4.5. 2.4.1.~4.のまとめ	§. 190
3. 金剛界マンダラ出現後のヴァイローチャナ	§. 191~195

(§印の右の数字は堀内本のテキスト番号を示す。)

から「三三昧」と呼ばれて、仏教タントリズムにおけるマンダラ瞑想法のひとつの典型を意味するようになった。もっともこの三段階のプロセスを経ないマンダラ瞑想法も存在するが、後世は金剛界マンダラ以外のマンダラの瞑想にもこの三段階の瞑想法が適用されるようになった。

「三段階瞑想」の構造はそれほど複雑なものではない。ようするに、第一段階にお

いてマンダラの中尊の瞑想すなわち精神的産出をなし、マンダラの核を形成する。この段階ではマンダラの全体的構造がおぼろげに瞑想されてはいるが、それはマンダラの中でかの中尊がどこに位置するのかを行者が知る程度にとどまる。第二段階ではマンダラに登場する諸尊の瞑想が行なわれ、マンダラ的全体的枠組みの中にそれらの諸尊のすがたあるいはそれぞれの尊格のシンボルのかたちそれぞれの位置に置かれるのである。この段階が実質的なマンダラ瞑想（観想）である。

第三段階ではマンダラが出現した直後の行者の行為（^{かつま}羯磨、カルマ）が問題となる。その行為は2つの異なった方向を有している。その二方向とは、第1にかの完成したマンダラが行者の心身の中へと取り込まれる方向であり、第2にマンダラを自己に取り込んだ行者が他者つまり他の衆生に対して働きかける方向である。もっともこの第三段階は「三段階瞑想」の中では詳しく取り扱われていない。『金剛頂経』の「金剛界大マンダラ」の場合でも表1に見られるように数節（§. 191～195）が割りあてられているのみである。

後期の仏教タントリズムではタントラのヨーガを二過程（二次第）に分けるのが一般的となった。その二過程の内の最初はマンダラの瞑想つまり精神的産出を行なう「生成の過程」（^{しやうき}生起次第）と、それに続いて行なわれる精神生理学的なヨーガの修練である「完成の過程」（^{くぎよう}究竟次第）とである。後者の過程は、出現させたマンダラを行者の心身に収めた後に行なうヨーガであり、「三段階瞑想」の内の第三段階と内容的には重なるところがある。

「生成の過程」と「完成の過程」とは、後に後期仏教タントリズムの瞑想法のもっとも代表的なものとなったが、「三段階瞑想」はしばしば「生成の過程」の実質的内容となった。つまり、「三段階瞑想」があらゆる種類のマンダラの「生成の過程」の内容となったわけではないが、特に金剛界系のマンダラ瞑想の場合には「三段階瞑想」が「生成の過程」の内容となった。

因みに「生成の過程」と「完成の過程」は始めから一組の実践形態と考えられていたのではなく、元来は別々の実践方法であったものが後世、一つにまとめられたものと考えられる。前者はマンダラを眼前に見ることのできるように精神的に産出することを目指しており、後者はもっぱら身体の中を走る脈管の中の息（気）を操作するヨーガに関わっている。さらに、後者の行法は前者と無関係に実践されることもあり、後者の行法システムの中でマンダラの精神的産出の完成が前提されているわけではないからである。

ところで『金剛頂経』の「金剛界大マンダラ」において一応、三段階による瞑想シ

システムの構造を認めることは可能だ。しかし、その内容、特に第一の段階（§. 17-2~33）は、後世の「生成の過程」の実質的内容となった「三段階瞑想」とかなり異なる。後世の「三段階瞑想」の第一段階ではマンダラの中尊のイメージが図像学的に明確な規定を伴って瞑想されるのであるが、『金剛頂経』の場合にはマンダラの中尊の図像学的諸特徴はほとんど問題とならず、マンダラの中心に位置する尊格が真にマンダラの中尊としてふさわしい資格を資えるに至るまでの過程が問題となっている。

さらに『金剛頂経』の中の三段階による瞑想の第二段階「金剛界マンダラの出現」における叙述の仕方も後世の「三段階瞑想法」の第二段階とはかなり異なる。というのは、前者の叙述の仕方は個々の尊格に関する瞑想が主要な内容であり、個々の尊格がマンダラの全体的構造のどこに位置するかは少なくともその個々の尊格を瞑想する場合にはほとんど問題になっていないのである。もっとも『金剛頂経』「金剛界大マンダラ」の章は、金剛界マンダラの諸尊の瞑想が終わった後で、短い節を設けてマンダラを図絵に表現する場合にそれらの諸尊がマンダラ全体の中のどこに位置すべきかを規定している。しかし、その規定はそれ以前の瞑想の説明と比較するならばほんのわずかな叙述でしかない。このことは『金剛頂経』が絵図としてのマンダラを説明しているのではなく、個々の尊格の瞑想法を説明しているのであり、さらにその瞑想が行なわれる際には今日われわれが見るマンダラ絵図を頭の中に描いているのではないということの意味するようと思われる。ならば、『金剛頂経』に述べられる瞑想はどのように行なわれたのであろうか。

4. 瞑想の構造としての三層

『金剛頂経』に述べられる金剛界マンダラの瞑想は、異なる3つの位階あるいは層の間を往来する心的エネルギーによって行なわれる。「三層」とも呼ぶべきそれらの3つのステージの間を実践者の心が「上下する」とともに実践者の心の動きに呼応して「実践者が向かい合う存在」つまり仏からの働きかけがあると考えることができる。もちろんその仏からの働きかけも実践者の心の動きであるということは可能であろう。しかしながら、後ほど見るように瞑想のシステムを理解するためには一応、実践者からの仏への働きかけと仏から実践者への働きかけという方向の異なる二種の心作用のベクトル（方向を伴うエネルギー量）を区別することが必要と思われる。

注意すべきことは、『金剛頂経』のテキストにおいては「実践者」あるいは「瞑想

者」というような概念は用いられていないことだ。『金剛頂経』は經典であるゆえに、經典の有する文学性に基き瞑想の主体や瞑想の対象となるものすなわち仏は、「ヴァイローチャナ」とか「一切如来」というような仏の名称によって語られる。基本的には、瞑想の主体は「ヴァイローチャナ」という金剛界マンダラの中央に位置する仏の名称によって語られ、瞑想の対象の全体的構造は「一切如来」という名称によって語られる。

「一切如来」(sarvatathāgata) という語は『金剛頂経』では複数形で用いられており、「すべての仏(如来)たち」を意味する。だが少なくとも『金剛界マンダラ』「金剛界大マンダラの章」では一切如来のイメージに関する図像学的説明はない。サンスクリット・テキスト (§.8~12) に見られるように一切如来が具体的なすがたを採るのは、金剛界マンダラに登場する個々の尊格、例えば十六大菩薩の誰かであったり、四妃の誰かとして現われる時である。十六大菩薩とか四妃とかは、後で見るように、われわれが今問題にしている「瞑想の構造としての三層」の内の一層に属する。他の二層は一切如来とヴァイローチャナである。金剛界マンダラの瞑想の三層の内、一切如来を第一層、十六大菩薩、四妃等の個々の尊格を第二層、ヴァイローチャナを第三層と名づけよう。金剛界マンダラの瞑想はこの三層間の心的エネルギーの運動によって説明することができるように思われる。

一切如来の性格とイメージについて再び考えてみよう。すでに述べたように、第一層としての一切如来は多数あるいは無数にいたのであり、「金剛界の全体であり」(堀内本 §.8)、十六大菩薩等のひとりとしてのすがたを採る時以外は、ひとりの尊格としての具体的なイメージはない。「人間のすがたを採った仏が無数に並んでいる」というイメージもないわけではないが、それが一切如来の主要なイメージではない。マンダラ瞑想の実践者(行者)の經典における象徴的表現であるヴァイローチャナ自身が一切如来の資格を得ることもある。というよりも、そのことが仏の資格を得ることであり、マンダラ瞑想の最終的目的である。したがって、マンダラ瞑想は、第三層の実践者が第一層の一切如来の資格を得るための実践であるといえよう。第二層はその実践の過程である。つまり、第三層が現状(因)、第二層が手段(道)、そして第一層が目的(果)なのである。

このようにして、金剛界マンダラの瞑想は一切の仏たちである「一切如来」は、瞑想の主体であるヴァイローチャナと十六大菩薩の個々の尊格の「背後に」潜んでそれ自身の固有のすがたを現さない。というよりも、一切如来自身の固有のイメージは存在しない。しいていうならば、それらは『金剛頂経』の序 (§.8~12) にいわれる

ように、「金剛界の全体」というすがたであり、個々の尊格のすがたであり、さらに実践者の象徴的表現であるとともに金剛界マンダラの中尊でもあるヴァイローチャナのすがたでもある。

金剛界マンダラの瞑想ではヴァイローチャナが十六大菩薩、四妃、八供養女等のそれぞれの尊格を瞑想し、それぞれのシンボルであるいはシンボルを持つ尊格を精神的に生み出して、しかるべき位置に置いていく。その置く作業が完成したときに、マンダラ瞑想というヨーガは完成する。一般にわれわれが見るマンダラの絵図はこのような「完成したヨーガ」によって作られたマンダラのイメージを写したものである。12世紀頃のアバヤーカラグプタ編『完成せるヨーガの環』（ニシュパナ・ヨーガ・アヴァリー）は今述べた意味の「完成せるヨーガ」によって見られたマンダラ26種それぞれの構成を述べたものである。もっとも『完成せるヨーガの環』は絵図に描くための一枚の概念図を述べているのみであって、マンダラを瞑想する密教的ヨーガのプロセスを述べているわけではない。『金剛頂経』は絵図としてのマンダラに対するよりもマンダラ瞑想のヨーガのプロセスに対してより力点を置いている。

5. 瞑想主体の確立－金剛界如来の成仏－

『金剛頂経』の「金剛界大マンダラの章」は表1に見られるように3部分に分かれるのであるが、第1の部分はヴァイローチャナが「成仏」すなわち「仏となって」その後続くマンダラ瞑想の主体としての資格を得る過程を述べる。つまり、この部分はシッダールタ太子が出家して修行の後に仏となったという歴史的出来事を踏まえているのである。

『金剛頂経』は一切如来がヴァイローチャナを囲んで天から人間たちの住む世界（瞻部洲）に降りたところから、いわゆる「三段階瞑想」の第一段の叙述を始める（§.17）。注意すべきことは、高橋 [1966: 376] が指摘するように、『金剛頂経』では法身（法を身体とする仏）の意味で「マハーヴァイローチャナ」（大毘盧遮那）という名称が用いられていることである（§.7）。因みに、法身たるマハーヴァイローチャナは一切如来たちの心臓に住むといわれる（§.17）。

さて、インド大陸のかたちを思い出させるような逆台形の瞻部洲つまり人間たちの住む世界に降り立ったヴァイローチャナと一切如来は、シッダールタ太子の神話的表現である一切義成就菩薩が菩提道場に坐って難行をしているところに近づく。そして、その難行を行なったからといって成仏できないと告げる。驚いた一切義成就菩薩

は「それではどのようにすればよいのか」と一切如来たちに問う。この間に対して一切如来たちが一切義成就菩薩に与えた答えが従来「五相成身観」と呼ばれてきたものであり、『金剛頂経』を代表する瞑想法の一つである。

ここは五相成身観を詳しく述べるところではないので、その考察は省略したい。また、五相成身観は今われわれが問題としている金剛界マンダラの個々の尊格の瞑想ともほとんど関係がない。この瞑想の要点は、一切義成就菩薩が一切如来の身体を自らの身体とすることである。そして、一切義成就菩薩は、金剛界大菩薩となり (§.29)、この菩薩は金剛界如来となり (§.30)、さらにこの如来は一切如来の位につくのである (§.32)

金剛界如来と一切如来たちは次には須弥山の頂上にある金剛摩尼宝頂樓閣に移動し、一切如来たちは自らの獅子座にあらゆる方向を向いて坐らせる (§.32) マンダラは通常、須弥山の頂上に建てられた宮殿に整然と居並ぶ仏たちを上から見下したものである。今の場合も須弥山の頂上にある宮殿あるいは樓閣の中で金剛界如来はマンダラの中尊として「あらゆる方向を向いて」坐り、この後、彼の周囲にもろもろの仏や菩薩が生まれ、その生まれた仏たちの配置図がマンダラ絵図となるのである。

ヴァイローチャナはしばしば四面を有すると文献に述べられ、また実際に四面の彫像や画像に表現されることが多いのであるが、この四面は先に述べた「あらゆる方向」を意味している。「三段階瞑想」の第一段階にあたる「瞑想主体の確立」のテキストの内、最後の節 (§.33) は、金剛界マンダラにおいて四仏(阿閼, 宝生, 世自在王すなわち阿弥陀, 不空成就, 図1, 2~5) が一切如来の資格を得てヴァイローチャナの四方に坐ると述べる。四仏の名称が記されるのは、『金剛頂経』のいわゆる「三段階瞑想」に関するテキスト (§.17-2~195) の中ではこのみであり、第二段階では四仏それぞれは「一切如来」の名で呼ばれている。このことは瞑想の内容と関係があると思われるが、これについては後に考察することにした。

このように「三段階瞑想」の第一段階に相当する『金剛頂経』におけるテキスト (§.17-2~33) では、中尊ヴァイローチャナとその四方に坐る四仏、すなわち金剛界マンダラの主要メンバーである「五仏」の名称とその位置が述べられており、マンダラの構図が意識されていないわけではない。しかし五仏それぞれの図像学的特徴は詳しく述べられていない。すでに述べたように、後世の「三段階瞑想」の第一段階ではマンダラの中尊に対する瞑想(精神的産出)が問題となるのであるが、『金剛頂経』ではマンダラの中尊が実践者の精神的産出の対象となるのではない。

6. 十六大菩薩の出現

今やマンダラの中尊ヴァイローチャナが一切如来の資格を得た。つまり、「第三層」のヴァイローチャナは「第一層」の一切如来の位についたのである。第二段階瞑想にあたる「金剛界マンダラの出現」では、「第三層」が「第一層」のさまざまな特性をかたちあるものとして産み出すのである。

第二層に属するもろもろの尊格が産み出されるにあたっては、パターンが決まっている。そのパターンは、十六大菩薩(表1, 2.1.)、四妃(表1, 2.2.)、八供養女(表1, 2.3.)、および四門衛(表1, 2.4.)の4種に分かれるが、前者の2と後者の2に大別することができる。すなわち、前者の2は産み出された尊格の位置が一切如来など仏の前後左右によって決められたが、後者の2では仏たちの並ぶ宮殿(楼閣)の内部の位置によって尊格の位置が決まるのである。

以下、十六大菩薩の出現の節(§.34~138)におけるそれぞれの菩薩の瞑想のパターンを考察してみたい。16の菩薩の内、第2の金剛王菩薩の瞑想(§.44~49)の部分翻訳しながら瞑想のパターンを取り出してみたい。第一の金剛菩薩の瞑想の部分(§.34~43)を取りあげなかったのは、第一の菩薩の場合にはパターンとは直接関係のない部分が多く含まれている上に、第3以下の菩薩の瞑想のパターンは第2のものほとんど同じだからである。

堀内本では5節であるが、以下9節に分けて考察してみたい。その方がかの三層間の心的エネルギーの移動をより明確に示すことができると思ったからである。

2.1.2. 金剛王菩薩[すなわち不空王大菩薩]の出現

[1] さて尊き者[ヴァイローチャナ, 毘盧遮那]は[以前の精神集中に]続いて「不空王大菩薩の誓約(三昧耶)より生じた「衆生」(sattva, 薩埵)への加持(聖なる力の付与)という金剛」と名づけられた精神集中(三昧)に入り、「一切如来を召く(鈎召する)誓約」と名づけられた一切如来の心髄(根本真言)を自分の心臓より出した。

「金剛王よ。」

ここではヴァイローチャナが、一切如来を召く、すなわち自らの瞑想の中に入らせることを目的とした誓約を表明する。第三層のヴァイローチャナが第一層の一切如来を自らの瞑想の世界に引き入れるという機能の具現である第二層の金剛王を出現させ

るのである。もっとも[1]において金剛王菩薩はその名称が呼ばれただけであって、そのかたちを顕わにしているわけではない。

なお、「サットヴァ」(sattva)とは仏教では勇氣あるいは勇氣ある者、衆生等を意味する。後世の密教的瞑想では、実践者自らが瞑想の対象として思いえがくすがたの尊格を「誓約ナマキ・サットヴァの存在」と呼び、そのすがた似ており、「誓約の存在」と一体となると考えられている「智シムニャーナ・サットヴァの存在」との2種のサットヴァを想定する。このように「サットヴァ」という語は実際の肉体を有する人間たち(衆生)と実際の人間ではない尊格との両者を意味する。いずれの場合もサットヴァには一種の人格が存するので、「サットヴァ」を場合によっては「人格的存在」と訳すことにしたい。

また「加持」(adhiṣṭhāna)とは、一般的にいて、聖性の位階のより上のもから下のものへ「聖なる」力を付与することをいう。例えば、師が弟子に対して加持するのである。今の場合、菩薩が衆生に対して行なうのである。

[2] こ[の心髄]が発せられるや否や、かの尊き金剛手(ヴァジュラ・パーニ)は一切の如来のもろもろの鉤となってすがたを現わし、

金剛手菩薩は十六大菩薩の第一の金剛薩埵きんごうさつだと同一の尊格である。この尊格は密教的瞑想にあって基本的な役割を果す。というのは、実践者はまずこの尊格と一体となり、次にこの尊格が他の尊格に変客するという過程をたどるからである。今の場合も、一切如来のもろもろの鉤となるという具体的な行為は、瞑想の行為の全体的統割者であるヴァイローチャナが行なうのではなく、第二層に属する金剛手が原初的な状態ではあるが第二層に属する「金剛王菩薩のシンボル形としての鉤」となるという行為を受け持つ。やがてこの鉤というシンボルが金剛王菩薩となって、完成された状態で第二層に属することになる。

[3] [もろもろの鉤は]尊きヴァイローチャナの心臓に入り、ひとつに凝り固って巨大な金剛鉤のかたちとなり、尊きヴァイローチャナの手に握られた。

この段階において「一切如来を召く」という第三層の誓約が金剛鉤きんごうこう(金剛杵きんごうしの付いた鉤)という具体的なすがたを採って第三層すなわち瞑想者の手の中に道具として置かれるのである。ということは、それがこの後で瞑想者の行為の中で用いられることを意味する。一切如来を召くという行為の遂行が明確に意識され、その行為のための

道具も明確なすがたを採ったのである。

注意すべきは、「ひとつに凝り固って」という表現である。もろもろの小さな鉤をひとつの巨大な鉤へと作りかえるのであるが、なぜ「凝り固る」という表現を用いたのであろうか。「現われる」とか「～のかたちを思う」という表現ではなく、ほとんどかたちのないものが物体としてのかたちを採る過程を示唆するような「凝り固ったもの」(ghana) という語は瞑想の内容と深く結びついていると思われる。この「凝り固ったもの」という語は十六大菩薩、四妃等いずれの尊格の瞑想のテキストにおいても見られる。というよりも、金剛界マンダラの個々の尊格に関する瞑想の実質の内容は、実に手に握ることができる程リアルなまでに個々のシンボルあるいは道具のイメージを凝固させた状態へと導くことにある。

もちろんこれらすべては観想者の精神世界の中でのことであり、観想されたイメージがあたかもエクトプラズマでできた物体のように物質的なかたちを採るというわけではない。だが、日常的にひとつのイメージを考えているのみでは「凝り固ったもの」が生れる可能性はほとんどない。今日われわれは、『金剛頂経』等の伝統による金剛界マンダラの瞑想者がどのような精神生理学的状況のもとで行なわれているのかを明確には知らない。その伝統が生きているか否かさえも定かではないのである。

- [4] それからその巨大な金剛鉤から一切世界にある微塵に等しい数の如来のすがたが現われ、一切如来を召くなど、一切仏の神通力によるもろもろの奇跡をなし、

ここでは第二層に属するものとして具体的なすがたを現わした金剛鉤がその機能を果したのである。もっともその機能が果されるのは無数の仏たちつまり一切如来の力によるのである。換言すれば、第三層のシンボルの機能が果されるのは第一層の仏たちの力によるのである。

- [5] [そして、それらの如来は] 極不空王（極めて空しくない王）であり、ヴァジュラサットヴァ（金剛薩埵）の精神集中が極めて堅固であるゆえに、ひとつに凝り固って不空王大菩薩の身体となって現われ、尊きヴァイローチャナの心臓に住して、この偈頌を述べて讃歎した。

ああ、実にわたしは不空王であり、金剛[杵]より生れた鉤である。というものは、一切に満ちる仏たちは[衆生それぞれの]完成（悉地^{しじ}）を得させ

るために[わたしを]召くから。

この段階でそれまで鉤というシンボルのすがたを採っていた十六大菩薩の内の第二の菩薩金剛王は身体を伴った不空王菩薩としてそのすがたを現わすのである。[3]では鉤がヴァイローチャナの手握られたが、[5]ではその鉤が身体を現わした菩薩となってヴァイローチャナの心臓に住する。第二層に属する不空王菩薩は第三層のヴァイローチャナの手に握られ、次に心臓に住する。

[4]においては明らかに「一切如来を召く」と述べられているが、[5]では仏たちが召く動作の主体として述べられているが、サンスクリット・テキストにおいてその目的語が明示されているわけではない。津田 [1995: 52] の訳では召く動作の目的が記されていないが、岩本 [1975: 87] の訳ではその目的を「余」つまり不空王菩薩としている。今の場合は岩本氏の解釈に従った。[4]に見られる「一切如来を召く」動作から[5]に見られるもろもろの仏たちが召く動作への変化はおそらく、第二層に属する不空王菩薩の「成長」を語るものであろう。

[6] ついで不空王大菩薩の身体は尊き者 [ヴァイローチャナ] の心臓から降り出て、一切如来たちの右の月輪に止って以前 [すなわち十六大菩薩の第一番目の場合と] 同様に教誡を請うた。

ここで注意すべきは、「一切如来たちの右」という表現である。この「右」が図1, 11に見られるようにヴァイローチャナの東方に坐る阿閼^{あしやく}如来の「右」を意味していることは、後のテキスト (§. 205等) によって明らかである。この「右」はヴァイローチャナに向かって坐る阿閼の右であって、ヴァイローチャナから向かっては阿閼の左になる。

すでに見たように (§. 33), 阿閼等の四仏が一切如来の資格を得て四方に坐っているのではあるが、このテキスト [6] では「一切如来の右」と述べられているのみであって、「東方に坐る阿閼如来の右側」と述べられているわけではない。図絵に描かれるときには、東方の阿閼如来の周囲に、十六大菩薩の中の第一から第四までの菩薩が描かれる。だが『金剛頂経』の観想の叙述 (§. 34~195) では第一の金剛薩埵 (図1, 10) の場合は「前」 (§. 41), 第二の金剛王菩薩 (不空王菩薩) (図1, 11) の場合は「右」 (§. 47), 第三の金剛愛菩薩 (図1, 12) の場合は「左」 (§. 53), および第四の金剛喜菩薩 (図1, 13) の場合は「後」 (§. 59) と述べられているの

みである。

「一切如来の右」等の表現は、「一切如来」が宇宙に遍満する無数の仏全員を意味するのではなく、マンダラの中で特定の位置を有し、限定された空間を占める何らかのイメージを有するものを意味すると考えられる。もちろん、それは四方に坐する阿閼如来等であるが、重要なことは〔6〕に見られるように、阿閼如来等の名称や位置が明示されていないことである。このような叙述の仕方は、十六大菩薩のみではなく、金剛界マンダラを構成する四妃、八供養女等の場合も同様である。このことはマンダラ瞑想の本質に関係することだと思われる。つまり、個々の尊格、例えば不空王菩薩の瞑想においては、第一層の一切如来の個々の特性を瞑想し、その特性を第二層に属する尊格として誕生させることに第三層は専念しており、少なくともそれらの尊格を生み出す過程においてはマンダラにおける位置関係はほとんど意識されていないのである。

ようするに、〔6〕では第二層の尊格が第一層の近くにかたちを採ったまま並ぶのである。このことは第三層の瞑想の主体の行為として生じた。ここでわれわれは三つの層が以前よりもより近い関係に置かれていることを知るのである。

〔7〕 そこで尊き者〔ヴァイローチャナ〕は「一切如来が〔衆生を〕召く誓約という金剛」と名づけられる精神集中に入り、「一切如来による召きの誓約」すなわち、余すことなき衆生世界の一切の衆生を召き、一切の幸福と満足を経験させるため、乃至、一切如来の集会に参加するという最高の完成を得させるために、かの金剛鉤を金剛鉤召菩薩（こうちゅう）に〔十六大菩薩の内の第一番と〕同様に〔彼の〕両手を授けた。

金剛鉤召とは金剛王、不空王の別名である。

この段階では第三層のヴァイローチャナによる第二層の尊格の職能、すなわち召くことの確認が行なわれている。〔7〕においては一切如来が衆生を召くというように、一切如来から衆生へという行為の方向が明確になっている。〔1〕では、一切如来は召く対象であったが、瞑想が進むにつれて一切如来が召きの主体となるという側面がより明らかに示されている。このように行為の主体が転換することを知ること自体が瞑想の目的のひとつでもある。次のテキスト〔8〕では召きという第二層の尊格の職能に焦点があてられる。そして、その職能は、第一層および第三層の行為そのものでもある。

[8] そこで一切如来たちは

[あなたは] 金剛鉤召, 金剛鉤召なのだ
 といって金剛名と呼ばれる灌頂を授けた。

灌頂とは水をふりかけるという行為による聖別の儀式である。この儀式によってそれまでにはなかった、あるいは異なる資格が与えられる。テキスト[8]においては、第二層の尊格として生れてきた不空王菩薩が召くことという自身の職能を果す資格のある菩薩として聖別されたのである。

[9] すると、金剛鉤召菩薩はかの金剛鉤によって一切如来たちを召きつつ、次の偈頌を述べて讃歎した。

これは一切の仏たちの最上の金剛智なのだ。というのは、一切の仏の目的が成就するための最上の召きだから。

ここでは資格を認められた金剛鉤召つまり金剛王菩薩が自らに授けられた一切如来の力を讃歎するのである。

以上によって十六大菩薩の第二の菩薩の精神的産出が終わり、この菩薩はそのすがたを保ったまま一切如来の「近くに」坐るのである。十六大菩薩4人ずつの4グループは四仏それぞれの「^{しんじん}親近」と呼ばれてきた。この後同じようなプロセスをたどり、第四番目の菩薩が誕生すると、表1, 2.1.5.に示したようにまとめ (§.62) が行なわれる。つまり、第一番から第四番までの菩薩それぞれの特性が短く述べられている。この四菩薩が阿閼如来の親近であることは、§.62に明示されていないが、順を追って瞑想する者にはその四菩薩が阿閼の周囲に坐る者たちであることは理解できたであろう。

十六大菩薩の第五番から第八番までの位置についてもテキストは「一切如来の前」「右」「左」および「後」と述べるのみであるが、これらは一切如来の具現である南方の宝生如来の親近であることは明らかだ。このようにして、十六大菩薩の精神的産出が終ると、次に四妃、八供養女等のそれぞれが「凝り固った」すがたを保ちながらマンドラの定められた位置を占めるのである。もっとも十六大菩薩の場合と同様に、『金剛頂経』は八供養女等の位置については「阿閼如来のマンドラの左側」(金剛嬉女の場合, §.153) とか、「金剛摩尼宝頂楼閣の左側の偶」(金剛香女の場合, §.166) というように、簡単に触れるのみである。

7. 金剛界マンダラ出現後のヴァイローチャナ

「三段階瞑想」の第三段階では完成したマンダラが瞑想者（行者）の心の中に収めとられる過程およびその後、その瞑想者が他者に対して行なう行為が述べられる。しかし『金剛頂経』におけるいわゆる第三段階は、一切如来がヴァイローチャナの心臓に住すると述べているのみである。つまり、この段階では第三層のヴァイローチャナが第一層の一切如来を自らの中に完全に収めとった状態にあることが明らかにされている。第一段階（§. 18）において、一切義成就菩薩に対して「そのような難行を行なっても、仏となることはできない」と告げた一切如来たちは、今や自分たちの「中央に輝く」（§. 193）仏となったヴァイローチャナに対して「一切如来として」（§. 192～193）敬礼するのである。

ようするに、この第三の段階において第三層のヴァイローチャナは第一層の一切如来となるのである。このように、金剛界マンダラの瞑想は、瞑想の主体あるいは行者の象徴的表現である第三層のヴァイローチャナが、瞑想という手段を通じて結果である一切如来の資格を得る過程であるといえよう。

8. むすび

以上、金剛界マンダラの瞑想の過程を『金剛頂経』第一章の「金剛界大マンダラ」の節の中、十六大菩薩の第二菩薩の瞑想法を中心に考察を進めてきた。『金剛頂経』に述べられる金剛界マンダラの瞑想は、この第二菩薩金剛王（不空王、金剛鉤召）の瞑想とほとんど同じものを積み重ねて完成していくものである。もちろんその積み重ねはマンダラ全体を意識したものであり、順次に行なわれる瞑想の対象としてのもろもろの尊格の職能にも違いがあることは言うまでもない。しかしながら、『金剛頂経』の叙述に従うかぎり、金剛界マンダラの瞑想は、後世に見られるように眼前にマンダラ絵図を置いてその絵図に示されたもろもろの尊格の配置関係を頭に描きながら行なわれるというものでないことは明らかである。

個々の尊格の瞑想が積み重なってマンダラが完成したとき、瞑想者は自分自身が中尊ヴァイローチャナそのものになったと感ずる。そして、彼は楼閣の中に他の仏たちと坐っている自分を知るとともに、一切の仏たちが自分の身体を満たしていることを知るのである、という。しかし、その瞑想がどのような精神生理学的状況で行なわれていたのが、あるいは行なわれるべきかについて今日われわれはあまりにわずかを知

っているのみである。『金剛頂経』はマンダラ瞑想の説明の後に瞑想の結果として生れるさまざまな超能力（悉地）について記している。したがって、瞑想はそのような力を結果として生むようなものであったと推測できるのであるが、その実態については今後の研究に俟つかない。

文 献

- 堀内寛仁
1973 『梵藏漢対照・初會金剛頂経の研究・梵本校訂篇（上）』密教文化研究所。
岩本 裕
1975 『密教経典』（『佛教聖典選』第7巻）讀売新聞社。
高橋尚夫
1996 「真実撰大乘現証大教王経」（『新国訳大藏経・密教部』第7巻）大蔵出版社。
津田真一
1995 『金剛頂経』東京美術。